

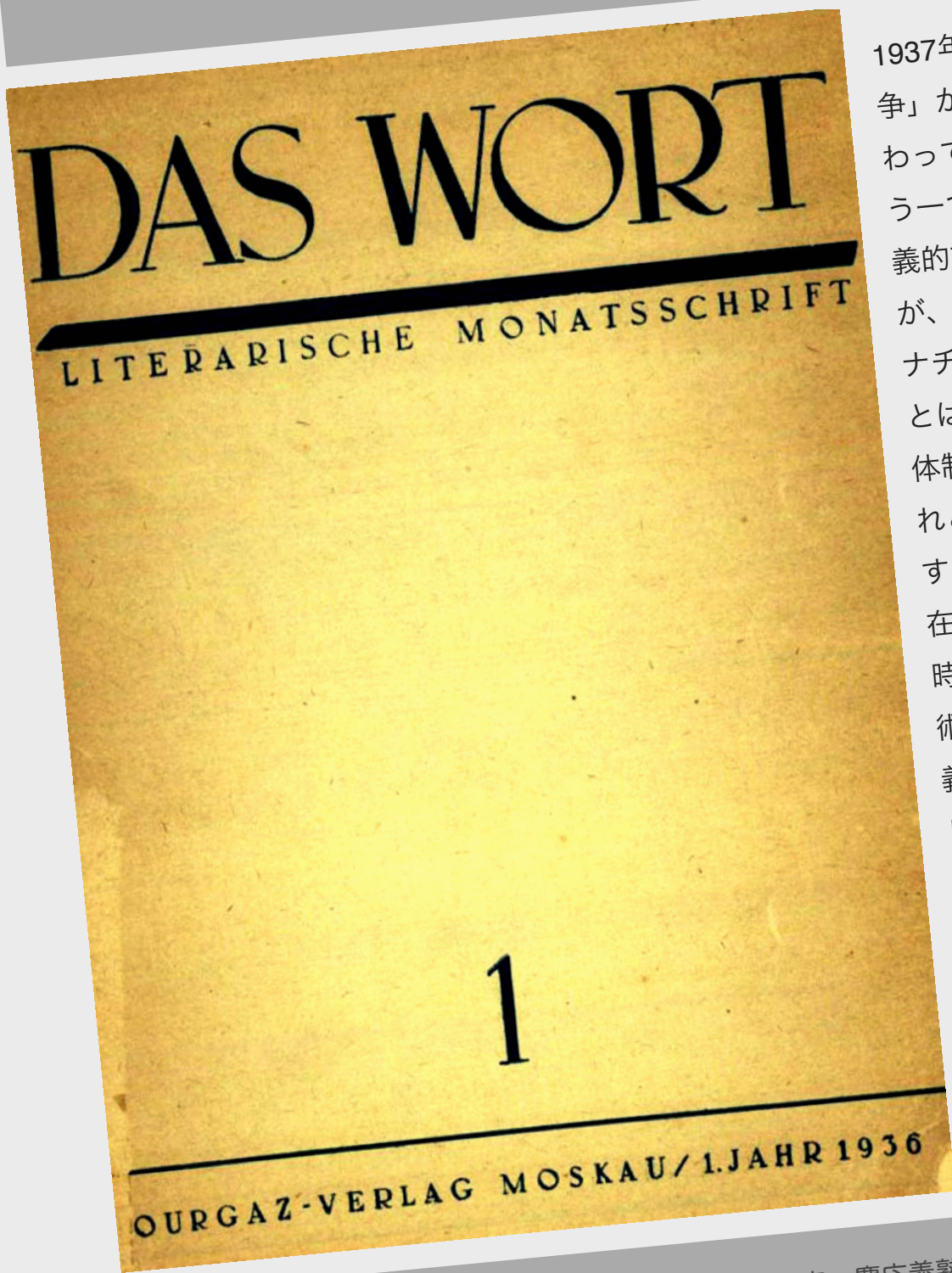
早稲田大学 演劇映像学連携研究拠点
第6回「翻訳プロジェクト／1938年問題研究会」

「ナチス演劇をどうとらえ、それとどう闘うのか？」

——1938年前後における

ソ連亡命ドイツ演劇家たちの理論的作業にふれて」

講演者：池田浩士（京都精華大学客員教授）



1937年から38年にかけて展開された「表現主義論争」が、「形式主義」批判、前衛芸術批判と密接に関わっていたことは、よく知られている。この論争のもう一つの問題点は、反ファシズム闘争における社会主義的文学・芸術の課題を明確にすることだった。だが、表現主義から出発しながらファシズム（厳密にはナチズム）への道をたどった作家・詩人を糾弾することとはなされたが、現にドイツを支配しているナチズム体制における文学・芸術の実態を具体的に批判し、それと闘うべき反ファシズム作家・芸術家の課題を提起するところまでは行かぬまま、論争は閉じられた。現在の（あるいは1968年以後の）視線で見るとき、同時代のナチス文学・芸術を反ナチズム陣営の作家・芸術家たちがどう評価し、それとの文化闘争を（社会主義リアリズムという「指導理念」のもとで）どう構想していたのかは、看過できない重要なテーマである。こうした観点から、1930年代にソ連に亡命していたドイツの演劇家たちが「表現主義論争」の前後に、あるいは論争の枠外で試みたナチス・ドイツの演劇との理論的対決に焦点を当てながら、マルクス主義的社会主義演劇とナチズム演劇とのいわば歴史的な闘いに目を向けてみたい。

池田 浩士
(いけだ・ひろし)



1940年生まれ。ドイツ文学者、評論家。慶応義塾大学大学院博士課程修了。1968年から2004年まで京都大学で教鞭を取る。2004年より現職。主要研究領域は、ナチスドイツ、天皇制日本など広義のファシズム社会における表現文化。著書に『初期ルカーチ研究』（1972年、合同出版）、『ルカーチとこの時代』（1975年、平凡社）、『ファシズムと文学——ヒトラーを支えた作家たち』（1978年、白水社）、『教養小説の崩壊』（1979年、現代書館）、『抵抗者たち——反ナチス運動の記録』（1980年、TBSブリタニカ）、『文化の顔をした天皇制』（1986年、社会評論社）、『死刑の「昭和」史』（1992年、インパクト出版会）、『（海外進出文学）論』（全5巻、2000年より刊行中、インパクト出版会）『虚構のナチズム——第三帝国と表現文化』（2004年、人文書院）など。訳書に『ルカーチ初期著作集』（全4巻、1975-1976年、三一書房）、エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』（1982年、三一書房）、『表現主義論争』（1988年、れんが書房新社）、『ドイツの運命（ドイツナチズム文学集成）』（2001年、柏書房）など。

日時 2012年12月1日（土）14時00分～17時30分【13時30分開場】
第1部：講演（14時00分～15時30分） 第2部：討議・質疑応答（15時30分～17時30分）
会場 早稲田大学早稲田キャンパス6号館318教室（演劇博物館レクチャールーム）
主催 早稲田大学演劇映像学連携研究拠点 平成24年度テーマ研究
「演劇研究基盤整備：舞台芸術文献の翻訳と公開」（研究代表者：秋葉裕一）
【来聴歓迎・予約不要】